

校長先生の初恋物語

第4話 涙の選挙



んも、足長君の名前を書いて、投票箱に入れました。

全員の投票が終わり、いよいよ開票となります。ダンプさんが、足長君ととっくんの名前を黒板に書きました。開票をしていくのも、ダンプさんが立候補したのです。ダンプさんは、投票箱の中に手をつき込んで、一枚ずつ手に取り、書いてある名前を、大きな声で読み上げていきます。まずは一枚目

「足長君に一票。」

まずは足長君の名前が呼ばれました。当然です。この投票箱の中に入っているのは、全部、足長君と書いてある紙です。次の一枚。

「足長君に一票。」

クラスのみんが、「わーっ。」と大喜びして、拍手します。その拍手に、足長君が両手を広げてこたえます。

「足長君に一票。」「足長君に一票。」……どれもこれも、足長君。どの紙も、全部足長君。もう、開票はクラスの半分以上が終わり、足長君で決定しているのに、ダンプさんはやめません。

よろひげ先生も、ダンプさんを止めません。とっくんは泣けてきました。クラスの全員から、ばかにされているような気がしてきて、悔しくて悔しくて涙が止まらなくなっていました。

「足長君に一票。」「足長君に一票。」「足長君に一票。」「足長君に一票。」……



足長君は自分の名前ばかりが呼ばれることが、相当気持ちいいのでしょう。椅子にふんぞりかえって、鼻歌を歌っていました。

「足長君に一票。」「足長君に一票。」「足長君に一票。」読み上げていくダンプさんの声は、どんどん大きくなっていきます。周りの友達も、さすがにここまで足長君ばかりになると、少しはとっくんのことがかわいそうに思えてきたのでしょうか。「足長君に一票。」というダンプさんの声に反応しなくなり、教室は静まりかえってしまいました。途中、一票だけとっくんに票が入りましたが、後はすべて足長君。足長君の圧勝。地獄時間がようやく終わりました。

ダンプさんは最後に、黒板に書かれていた足長君の名前の上に、赤いチョークで花丸を大きく書きました。

足長君は、みんなの前に立ち、演説を始めました。

「このクラスの学級委員になりました。足長です。ぼくがこのクラスの学級委員になったからには、もう安心してください。地球の平和は、ぼくが守ります。」

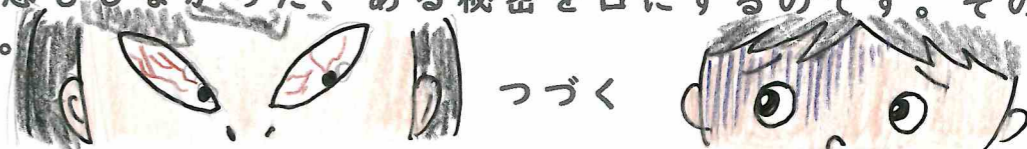
へんてこりんな演説でしたが、拍手喝采でした。ようやく終わったはずかしい時間にほっとして、とっくんもいっしょになって拍手をしていました。

でも、ダンプさんはそれで終わりません。休み時間になると、ものすごくこわい顔をして、とっくんのところにのっしのっしとやってきました。

「とっくん、ちょっときて。」

ダンプさんは、いやがるとっくんを無理矢理ろうかに出して、そのまま、だれもない音楽室まで引きずって行きました。

ダンプさんは、音楽室のドアを勢いよくしめると、とっくんの方をふりかえり、そして、そのだれもない音楽室で、なんと、ダンプさんが、予想もしなかった、ある秘密を口にするのです。その秘密とは……



ダンプさんの口にする衝撃的な真実とは。さらに、とっくん、ダンプさん、よしこさん、足長君に続いて、新しいキャラクターも登場。どうなる。とっくんの初恋は。

次回予告

ダンプさんの告白

